創生ジャーナル Human and Society, 2019, 2, 63-85.

第２回学生主体キャリアイベント実施報告

――「海を渡って～自分自身を変えるきっかけ」――

渡邊　洋子（新潟大学），清水　千恵（立命館宇治高校教員），山城　裕太郎（新潟大学）

はじめに

2019年現在､21世紀もすでに20年近くを経る中、グローバリゼーションと高度情報化の進行と科学技術の目覚ましい進歩を受け、私たちの日常生活は大きく変容してきた。海外留学や海外旅行、海外での仕事や社会活動など、国境線を超えて多様な生活や生き方をすることは、物理的には、以前よりずっと容易になった。だが、他方で、社会経済の縮減傾向と、「わざわざ現地に行かなくても膨大な情報が得られ、疑似体験が可能な」環境の中で、若者にとって海外はある意味で､「海を渡って」に示されるように、一大決心をしてチャレンジすべきハードルの一つになっていることが窺える。

本稿は、そのような中で、学生の発案を契機として学生の手により企画・運営されたイベントの包括的な実施報告である。執筆者の役割分担は、山城が企画・運営スタッフの立場から、イベントの記録資料とアンケート調査回答の整理・確認、および「おわりに①」を担当し、ゲストスピーカー清水千恵氏には、講演内容と懇談会の文字おこし原稿の内容を確認・確定いただき、渡邊がそれらの編集と１～３、および５（参加学生・主催学生アンケートの結果紹介と若干の考察)、６「おわりに②」を担当した。ゆえに、特に断った部分を除き、本稿は三人の共同作業によるが、最終的な執筆責任は渡邊にある。

１　本イベントの趣旨と準備

2018 年 2 月 10 日実施の第 1 回の学生主体キャリアイベント（本ジャーナル創刊号に報告を所収）終了後、学生研究会メンバーの山城から、第 1 回の企画運営経験を活かし、より自らの関心に沿ったテーマでキャリアイベントを開催してみたい、との申し出を受けた。海外留学経験者、ないし海外で仕事をしてきた方や実際に活躍しておられる方から直接に、お話を聞く機会にしたいとのことであった。

創生学部 1，2 年生の中でも、大学入学前ないし後に、海外留学や海外研修、国際交流活動などへの意欲をもち、行動につなげたいと希望する学生は少なくない。だが、新生の同学部生には、いわゆるロールモデルとなりえる「先輩」がいないこともあり、特に海外渡航に関わっては、希望実現への道筋や契機をつかみにくい傾向にあることが、教員から見て課題の一つと思われていた。当時、教員研究会メンバー間で詳しい検討機会がなかったこともあり、第 1 回キャリアイベントを発案した渡邊が研究会の承認を得て、バックアップすることとした。企画運営は、山城が中心となり、同様の関心をもつ学生数人に、スタッフとしての参加を呼びかけることとなった。

ゲストスピーカーは、同じ大学出身の「先輩」というロールモデル的要素を重視し、新潟大学教育学部（当時、教育人間科学部）卒業生で、在学中から海外渡航・留学を経験し、現在は英語限定クラスの担当者として教壇に立つ清水千恵氏に依頼することとした。渡邊の知人であったが、その経歴や経験に関心をもった山城が強く希望し、清水氏も協力を快諾されたことから、企画が動き出した。

事前準備については、企画・運営は、企画・運営メンバーにほぼ一任した。運営メンバーが多いと打ち合わせミーティングの日程調整を難しくなるとの判断から、簡略化した準備体制が取られた。運営メンバーの 2 年生 4 人（新家亜澄、関戸健太、長谷部千紘、山城）が適宜、授業の合間などに打ち合わせをしながら進め、週 1 回程度、教員に報告・相談に来ることとした。なお、運営メンバーは、清水氏とは、日程調整や当日の段取りを相談する早期の段階から、電子メールとスカイプを使い、双方向で直接に意思疎通を図っている。この段階から、学生の

ニーズや期待をゲストに伝え、共有してもらうことが十分できたと思われる。それを踏まえ、学生たちが掲げたイベントの「趣旨」は次の通りである。

新潟大学の先輩をお招きし、海外での豊富な経験を聞くことで、在学中や将来に海外での活動を視野に入れるきっかけ、参考にすること。また、ゲストスピーカーと話をすることで海外での活動の疑問や不安を解消し、ヴィジョンを明確にすることを目的とする。

２　当日のプログラムと運営

プログラムは、次のように企画された。

第２回キャリアイベント「海を渡って～自分自身を変えるきっかけ」

日時：2018 年７月２日（月）14：00～17：00
場所：新潟大学総合教育棟　学修室１D303
ゲスト：清水千恵氏（立命館宇治高校教員・新潟大学卒業生）

14:00　集合・会場準備・打ち合わせ
14:25　受付開始
14:40　開会
15:00　ゲストスピーカーのお話
15:20　休憩・机移動（円形）
15:25　質問・グループ話し合い

図１　学生主体キャリアイベントチラシ（創生学部２年 山城裕太郎制作、タイトルは、同　新家亜澄発案）

16:05　ゲストより一言
16:10　閉会
16:20　後片付け、振り返り（～17:00）

当日は、運営メンバーも含め、一部の学生がイベント途中から授業に出席する必要があったこと、また参加者がゲストへの直接の質疑応答の時間を重視したことなどから、上掲の通りには運営されていない。実際には、Ⅰゲストスピーカーからのお話（～15：30）、Ⅱ円形になっての質疑応答と意見交換（～16：30）、Ⅲさらに少人数での質疑応答の続きと話し合い（～17：30）、といった三部構成となり、予定時間をかなりオーバーしつつも、熱心にやり取りが続けられた。この様子は、IC レコーダーから音声を起こし、清水氏と該当学生から確認・承諾を得た記録を掲載する。また、参加学生と主催側学生に対して行ったアンケート調査を紹介し、若干の考察をする。

３　ゲストスピーカー経歴と運営関係者

(1)　プロフィール

写真１　ゲストの清水氏

清水千恵氏は、2005 年４月～2010 年３月の間、新潟大学教育人間科学部の学習社会ネットワーク課程に在学し、卒業した。その間、2007 年９月～2008 年８月の約１年間、中華人民共和国の北京師範大学本校に一年間、新潟大学を休学して留学し、さらに 2009 年２月～７月、北京市聯合大学に交換留学生として留学している。

新潟大学卒業後は、2010 年４月～2013 年３月 京都大学大学院人間・環境学研究科の 共生人間学専攻外国語教育論講座において英語教育を研究後、修士課程を修了した。さらに、2013 年４月～2015 年８月の２年４か月、青年海外協力隊として、インドネシア共和国の国立アイルランガ大学日本研究学科に派遣され、日本語教師として活動した。

帰国後の 2016 年４月から現在に至るまで、「世界を体験しながら、世界の中に確かな自分を育む」（Charles Fox 校長）を掲げる、立命館宇治中学校・高等学校の IB（国際バカロレア）コースの常勤講師として日本語教育に従事している。

(2)　　企画・運営メンバーおよび関係者

【新潟大学創生キャリア研究会 2 メンバー】

新家亜澄，関戸健太，長谷部千紘，山城裕太郎

（以上、50 音順）

【キャリア創生研究会】

オブザーバー参加　メンバー

中村隆志，渡邊洋子，田中一裕，堀籠崇

（以上、順不同）

4　当日の記録・報告

(1)　　開　会

司会（新家）　清水千恵さんは新潟大学の卒業生で、大学在学中に中国に 1 年留学したり、青年海外協力隊としてインドネシアに行ったり、海外の基調な経験をお持ちの方です。現在は京都で日本語教育に従事していらっしゃいます。

本日のスケジュールはお手元の資料をご参照ください。休憩時間が 3 時 5 分となっていますが、訂正して 10 分ほど遅くさせていただきます。講演後は質問タイムを設けますので、机の上の付箋はメモや質問など自由にお使いください。講演中は撮影と録音をしますのでご了承ください。では清水さんからお願いします。

(2)　　ゲストスピーカーのお話

清水千恵

①　「#海を渡って～」・自己紹介

はじめまして。清水千恵と申します。今日来られている方はだいたい創生学部の 1 年生、2 年生になりますよね。ではまず「75 億分の 1」という数字、これは何でしょう。

そう、正解。だいたいいま世界の人口は 75 億人くらい。75 億分の 1 というのは私です。75 億人いる中の 1 人が経験した一つのことだよというのを念頭において聴いてもらいたいなと思って、「海を渡って～自分自身を変えるきっかけに～」というタイトルにしました。

皆さんはツイッターをやっていますか。だいたいやっていますよね。講演中、聴いていて何か気になったこととか、自分でハッと気付いたこと、あと疑問に思ったこととか、「いいね！」とか、質問とか感想とか、今回のタイトル「海を渡って～」に#を付けて検索してほしいと思います。だから、スマホをいじりながら聴いてもらって構いません。そうすると、この#を検索するだけでみんな気付きを共有できますし、私も自分であとから振り返ってみて分かるので、ぜひそれをやってほしいと思います。

先ほども紹介していただきましたが、簡単な略歴を申します。清水千恵。長野県出身です。大学は新潟大学に来ました。2005 年に新潟大学教育人間学部の学習社会ネットワーク課程に入学して、2003 年の 9 月から 1 年間休学して北京師範大学に留学しました。ちょうど 2008 年に北京で何があったでしょう。大イベント。

（参加者　オリンピック。）

そう、正解。ちょうどオリンピックが起きたときでした。だからものすごく変化も見えたし、中国は安く買えたので実際にオリンピックの競技も幾つか見ることができました。オリンピックまで見て帰国しました。帰国して半年間、また 3 年生をやったのですけど、その間に新潟大学の教育大学と北京聯合大学が交換留学協定を結んで交換留学ができるようになったのです。それで「清水さん、もう一回行ってこい。帰ってこなくていいよ」と当時のエージェントの相庭先生に言われて、2009 年の 2 月からまた半年間、交換留学しました。そのときには単位

写真２　開会の様子

写真３　「地球の中の一人」参加者の様子

もだいたい取っていたので、帰ってきて半年で卒業した形になります。2010 年に今度は京大の大学院に進みます。大学院で修士課程を終わったあとに青年海外協力隊としてインドネシアの大学に派遣され、そこで日本語教育をしていました。2016 年に帰国して半年後ぐらいから、現職の立命館大学付属の中高一貫校でまた日本語を教えています。そういうことから私が経験してきたことをちょっとずつ話したいと思います。

② 留学にあたっての動機

まず大学時代。大学時代の 1、2 年生のときに私は何をしていたかなあと考えたのですが、やはり一番大きかったのは、入学式の 2 日目ぐらいに学習社会ネットワーク課程には訪中団というものがあることを先輩から聞いて、行きたいなと思ったことです。その当時は 3、4 年生しか行けなかったんです。だけど行きたいと思って、相庭先生に会うたびに毎日、「先生、私も行きますから連れて行ってください」と言っていました (笑)。それで連れて行ってもらったのですが、その後は毎年、1 年生から参加できるようになりました。それがきっかけで中国留学をしたわけです。1 年生と 2 年生のときに行きましたが、1 年生のときが一番暇というか、ゆったりしたスケジュールを組んでいて、月～金はほぼ授業…？…やっていました。だけど 2 年生になって火がついて、ほぼ毎日スケジュールを組むという感じでした。留学する前に全ての卒業単位を取り終わっていたので、何か火がついてやっていました。

部活は、入学したときに何か新しいスポーツをやりたいなと思ったのですが、「ま、いいか」と思って 1 年を過ごしました。でも 2 年生になったときにやっぱり入りたいなと思って、2 年からラクロス部に入部しました。それもちょっとイレギュラーなんですけど。朝練とか、朝 5 時ぐらいに起きて？天気判断をやっていました。ラクロス部、いますか。

（学生（男性）　ラクロス部じゃないですけど、ラクロスが好きです（笑）。）

よかった。ラクロス部に入ったり、バイトをしたり、本当によくある大学生活を送っていました。

大学に入る前からもともと海外に興味があって、大学のときに留学はしたいなと思っていたのです。でも英語圏に行きたいと思っていました。でも大学に入って訪中団に参加して、日本の文化と中国の文化は結構近いし、同じ漢字を使っているし。でも私は中国のことを全く何も知らないなと思ったんです。実際に中国に行って学生たちと触れ合う、交流する機会があるのですけど、自分が今まで中高で 6 年間学んできた英語が全く使えなかった。コミュニケーションができなかった。学んできてそれなりに得意だったんですけど、コミュニケーションができないことに衝撃を受けました。あれ、なんなのって。

1 年のときにその衝撃を受け、2 年生のときにもやっぱり駄目だと。彼らの言語で話せるように、交流できるようになりたいと思って、2 年の訪中団ぐらいのときに、よし、3 年で留学しようと決めて、そのまま留学しました。だから、本当は親にも事前に言うべきだったのですが、全部決まって済ませたあとに「私、留学するから」と言って行きました。

③ 留学先でどう中国語を勉強したか

留学時代はどんなことをしていたか。当時は休学して行くしかなかったんです。どこにも交換交流協定がなかった。教育学部に聞いたら「それは無理です」と言われて、休学するしかないと思って休学することにしました。これは中国に行って知ったのですが、国立大学は休学が無料なんです。私立大学は籍を置いていることによってお金が掛かるんですよね。それが衝撃でした。「国立大、有利じゃん。これはすごいいことだ」と思ってちょっと優越感をもって、休学していました。その当時、知っていた中国語は「シェイシェイ」と「ニーハオ」だけ。一般によく言われている言葉しか知らなかったのでめっちゃ不安もあったんですけど、それよりも楽しみ、わくわく感が優って、なんとかなるでしょって行きました。

でも実際は大変でした。申請を出すときに「あなた、住むところがないよ」と言われて。こっちでは学生寮の申請とかはしていたんですけど、それが全然登録されていないよと言われて、着いた日にすぐ困ったわけです。「えっ、じゃ私、どうすればいいんですか」とか言っていて、どうしよう、どうしようと走り回っていたら助けてくれる人がいて、「ここが空いているから、ここに入れ」といって入れることになりました。だから、なんとかなるものですね（笑）。

本当に「シェイシェイ」と「ニーハオ」しか分からない状態だったんですけど、最初の 1 年目は北京師範大の漢語学院といって中国語を学ぶための学部に入りました。それは中国語を学ぶ学部なので外

国人しかいない。国際センターみたいな感じです。そこに入る前にクラス分けをするんです。ベースメントテストというのがあって受けたのですが、「シェイシェイ」と「ニーハオ」しか知らないのに筆記ができてしまったんです。日本人の有利なところって、漢字が分かるからなんとなく答えられる。筆記試験しかなかったからよくできちゃった。

だから、一番下のレベルなのに 1 個上のクラスに配属されて、そのクラスも日本人は一人もいない。インドネシア人とか、韓国とか、アメリカとか、ほかの国の人がいるところに入って、最初の授業は本当に何を言っているか分からない。みんなは笑っている。「えっ、なんで笑っているの？」。本当に宿題すら分からない。未知の宇宙人の言語みたい。何を言っているのか分からない。でも「ニーハオ」の挨拶だけは分かるんです。

そういう状況だったので、もう本当にひたすら勉強。行く前に相庭先生からは「空っぽのスポンジになって行け」って言われていたんです。空っぽのスポンジの吸収力ってすごいじゃないですか。カラッカラの軽石みたいな感じで、水を吸い込んだらバーッてなる。だから、頭にあるのは全部捨てて、中国語だけを吸収する勢いでひたすら勉強です。ルームメートの韓国人と一緒に話しながら勉強をしていました。2 週間ぐらいして、宇宙人の言語だったのがアルファベットに聴こえるようになってきて、1 カ月ぐらいたって単語が分かるようになってきて、2 カ月ぐらいたったらもう意思疎通ができるようになってきた感じでした。そこからはもうイエーイみたいな感じになりました。そこまではもうひたすら予習、復習。時間があれば勉強をしていました。

④ 言語以外に学んだことは…

勉強以外には、ラクロス部に入っていたので、週末は北京にあるラクロスチームに入れてくださいといって入れてもらったり、あと私の両親がバレーの選手のコーチで小さいころからバレーが身近なものだったので、バレー部にも入れてもらったりしました。だから土日とか平日の夕方とかは、そういう中国人の大学のサークル的なところで一緒にやっていました。

留学するときに決めていたことの一つ目は、「ためらわないこと」。留学って時間が決まっているじゃないですか。時間が決まっている中でいちいちどうしようかな、やろうかな、やらないかなといって先延ばしにしていたら本当に時間がもったいない。いまやれることがあるのにできないなんて。お金ももったいないし、時間ももったいない。そう思ったので、ためらわないこと。やりたいと思ったら行く。気になったら話しかける。だから、道端の横断歩道で待っている隣の人でも、気になったら話しかけたりしていました。友達に「だまされないほうがいいよ」と言われました (笑)。どう思われてもいいと思ったので、それぐらい本当に気になったらやっていました。

もう一つは「日本語はしゃべらないこと」。もっと具体的に言うと、日本人とつるまない。最初の 1 年目の留学のときは、交換留学しているところは日本の外国語大学や日本の総合大学と提携しているところが多かったので、日本人学生も結構いました。そうすると、日本人だけで固まっているのが目立つ。その人たちを見ていると、私より例えば 2 年早く来ているのに全然しゃべれないとか、同じ時期に来たのに全然しゃべれない。私だって「シェイ、シェイ」と「ニーハオ」しか知らなかったのに、私に質問してくる。そういうのを見て、それはなんかもったいないなって。あの人も北京にいるんだよね、別にいいやと思って、極力つるまないようにしていました。それでもやはり日本食が恋しくなったりするときもあるので、そういうときは一緒に作ったりしました。まったく日本語を話しません、日本人を無視しますという感じではないですけど、なるべく現地の人、あとは外国人の友達と一緒にいるようにしていました。

⑤ 留学によって初めて知ったこと

この留学で知ったことというか、私が得たなと思うことは、まずは言語が通じる楽しさですね。言葉が通じたときの喜びはものすごいです。皆さんもどこか旅行に行って料理が注文できたとか、そういう経験をされているかと思いますが、最初、私は全く通じなかったから、通じた瞬間、相手が何を言っているか分かった瞬間はとても楽しくて、言語でコミュニケーションできるってすごく楽しいなというのを実感しました。

もう一つは、言語はツール。言語は道具であるということです。行く前までは、中国語ができることが目標になっていました。でも、行っていろいろな課題が出てくる中で気付いたのは、言葉はできても話す内容がなかったら話せないということ。話す中

身がなかったら何も言えない。そのときに、「ああ、言語は単なる道具なんだ。だから言語を学ぶことが目的ではなくて、言語を使って何かすることを目的に置くべきだな」と強く思いました。

⑥ 日本の見方について

日本に対する見方も非常に変わりました。実はそれほど日本が好きではなかったというか、それもあって小さいころから海外に行きたいと思っていたんですけど、向こうに行っていろいろな国の人と出会う中で、日本はこれがすごいよね、あれがすごいよね、日本の文化はいいよねとか、日本のマナーとかを見るとすごいねとか、すごく言ってもらったんです。そのときにああ、日本はいい国だなと思って。外から日本を見ることで、自分の中で日本に対する見方がすごく変わりました。だから、日本がとても好きだって胸を張って言えるようになりました。

⑦ 世界の面白さ

あとは、「世界の面白さ」と「友好は知人から」ということです。まず、世界の面白さということですが、これがクラスメートたち。ずっと仲のよかったスペイン人の子がこの前たまたま京都に来て、10 年ぶりに再会することができました。やっぱり国によって考え方とか文化が違いますよね。皆さまも知っていると思いますけど。誕生日の祝い方一つでもそう。例えばインドネシア人の祝い方って、いきなり誕生日の人を引っ張り出して、木にロープでくくり付けるんです。「ほんとにもう、何するんだ！」と思ったら、牛乳とか、卵とか、泥水につけた靴下とか、ひたすら投げるんですよ。いじめですよ。でもそれが彼らの祝い方らしくて。だから木にくくり付けられている人を見たら、「あ、インドネシア人が誕生日を祝っているんだな」と思って見ていたりしました（笑）。

好きな異性のタイプもそう。それこそスペインの子なんて「胸毛がなかったら男じゃない」ってよく言います。それって日本人からしたら「ん？」と思う。料理の持ち帰り方も、日本って料理屋さんで汁物を持ち帰るってあんまりないじゃないですか。だけど中国って、ビニール袋にそのままスープを入れて持ち帰れるんですよね。そういうこともやっぱり違うなと思って。日本ではないことがたくさんあるなと思いました。留学する前も、いろいろな文化がある、いろいろな人がいると知ってはいたんです。でも本当にいろいろな文化があるんだとか、地球にはいろいろな人が住んでいるのだとか、実体験できたことがすごくよかったなと。知っていたことが分かったわけです。

⑧ 「友好は知人から」の実体験

もう一つ、さっき「友好は知人から」と書いたんですけど、何かというと、これが本当に一番大きい、私が中国留学で得たものなんです。

これは北京オリンピックのビーチバレーの会場で行われた、大学対抗ビーチバレー大会に参加したときの写真です。このバレーチーム自体が仲よかったのですが、私と同い年のこの子とは仲よくなって、仲がどんどん深まっていくと同時に本音を私に話すようになったんです。何と言ったかというと、「ウォ　ブーシーファン　リーベン（俺は日本が嫌いだ）」って。なんとなく想像はつきますけど、「えっ、なんで？」「いや、俺のじいちゃんは日本軍に撃たれた。俺のじいちゃんからいろいろ聞いている。だから俺は日本が嫌いなんだ」と彼は言ったんです。

バレーの練習が終わった後にだいたい食事に行ったり迎えに行ったりしていたんですけど、そのときから事あるごとに必ず「俺は日本が嫌いだ。日本が本当にいやなんだよ」と言うようになりました。「おまえ、俺が何に怒っているか分かるか」「日本軍が悪いことをしたからでしょ？過去の戦争のことでしょう」「そうなんだけど、そうじゃなくて日本人が過去のことを嘘だと言うからだ。信じないからだ。何人虐殺したとか、数字を嘘だと言って信じないと言うからいやなんだ」と言ってきたんです。ちょうどこのころ、確か日本での公開は中止になったと思うんですけど、南京大虐殺を描いた『南京！南京！』という映画が上映されるタイミングだったんです。「おまえ、それを見に行け。見に行って感想を言え」みたいな。そういう話になった。でも私は逃げたくなかったので、毎回毎回向き合って話していたんです。

そうしたら、だんだん彼の発言が変わってくるんです。まず、「なんでおまえは日本人なのだ」とか、「おまえが日本人？なんておかしい」とか言い始めるようになった。もっとどんどん進んでいくと、「俺は日本が嫌いだ。でも全ての日本人がそうでないことが分かってきた」。もっと言えば、「俺はおじいちゃんにおまえという日本人のことを話した。まだ日本は嫌いだけど、全ての日本人がそうじゃないんだ

な」みたいなことを言うようになった。

最後、私が帰国するときに彼がくれた言葉がこれです。「俺はおじいちゃんにもうおまえのことを話してある。中国と日本の両国が永遠に、これから先ずっと友好関係を進めていくことを願う」と言ったんです。この言葉をもらった瞬間に、もう私はブワッて涙が出ました。いまも本当に涙が出そうになるんですけど、このときに、これだけで私が中国に行った意味があったなと強く感じました。もう一つ強く感じたのは、こういう一つ一つの関係が本当の友好をつくっていくんだなと。この経験から、私は生きている限り、できる限り私とどこかの国の人でこういう関係をつくっていきたいなってすごく思いました。これだけで私が中国に行った意味がある。これが非常に大きいことでした。

⑨ 帰国から大学院受験へ

そういうことをいろいろ経て帰国します。帰国後に感じたことです。結構テンションを上げて帰ってきたのですが、新潟大学に来て、なんかみんな元気がないな、学生に活力がないなってすごく感じました。なんでだろうというのは分からなかった。でもなんか元気ないと思った。友達も暇があれば「何かいいことないかなあ」と言っていたりしていて、なんかなあと思いながら卒業まで行きます。

このときに私は日本語教師になりたかった。中学生ぐらいからの夢が日本語教師になることで。日本語教師になって海外に行くことが夢だったのですが、それが中国へ行くことでより強くなります。日本語教師になるための資格を取るには日本語教育能力試験というのがありまして、独学で勉強して大学 4 年生の 10 月に合格して、資格を取りました。

卒論は「第二言語習得における個人差」。留学した先で、言語の習得にものすごく差があるなと。滞在年数に限らず上手になる人は上手になるし、3 年、4 年いても全然話せない人は話せない。なぜこの個人差が生じるのだろうと気になっていたので、それをテーマに書きました。

それ以外にもっと専門性を高めたいという気持ちがあったので、大学院に進もうと思って大学院の受験勉強をしました。でも「しました」と言ってもそこまではしなかった。受験勉強をどうしたらいいか分からないわけです。実は最初の大学院の入試はボロボロでした。京都大学の「外国語教育論講座」に行きたいと思って受けに行ったんです。一次試験、二次試験は両方とも突破して、そのあと面接があるんです。面接にはこれぐらいの人数の先生たちがいて、英語のネイティブスピーカーの先生もいて、ぐるっと囲まれてめっちゃ質問される。でもその質問に全然答えられなかった。なぜかというと、研究したいことがなかったから。研究計画が全然見えていなかったから。京大をなめていたんです。本当にそれぐらいダイレクトに言われて、これはまずいと思った。

その面接が終わったあとに「このままでは絶対落ちる。落ちたら駄目だ。私はここに行きたいんだ」と思って、たぶん本当はやってはいけないと思うんですけど、入りたい研究室の先生のドアをダーッとノックして、「入れてくださいよ、先生」って。「？このままじゃ駄目なのか」「でも入りたいんです」。涙ながらにそう言った。そうしたら、またいろいろ厳しいことも言われました。ただ、研究計画書を来週持ってきたら考えてやると言われたので、分かりましたと。京都から新潟に帰って、1 週間でバーッと書いて、1 週間後に研究計画書を持って行き、認めてもらえたわけです。直談判というのはそういうこと。でもこれは大学院生ではなくて、研究生としてです。修士の見習いというか、試しに残してみましょうという、研究生の立場で入学させてもらった。その研究生をしているときにもう一回入試を受けて、修士課程に入ることができました。

これが受験勉強の様子です。一次試験も二次試験も英語でエッセーを書くんです。一次試験は 90 分で 2 本、二次試験は 90 分で 1 本書く。英語の課題が出て英語で書くので、毎日ひたすら英語でエッセーを書くというのをやっていました。直前は本当にこういう感じで、倒れたりもしたんですけど、入学できました。

⑩ 大学院時代ー学ぶ楽しさ

入学したあとは学ぶことがすごく楽しくて。新潟大学ではあまり熱心ではなかったこともあるのかもしれないんだけど。大学院の人間環境学研究科というところにいたんですけど、それには関係ない農学部とか、法学部とか、一般教養もそうだし、教育のほうにも興味があって、面白そうだなと思ったものは全部取って勉強していました。だから最後、必要単位の 3 倍ぐらい取って修士を卒業しました。それぐらい楽しかったです。私は漫画の『ONE PIECE』が好きなんですけど、『ONE PIECE』の授業を取って、

こんな授業ができるんだと思って非常に楽しかったです。

大学院の授業と並行して、デザインや写真も好きなので、京大に長い商店街があるんですけど、商店街の人たちとつながってお店のショップカードを作ったり、写真集を作ったり、あとはシンガーソングライターのアルバムを作ったり。そういうことをしながらいろいろな人と出会ったのもこの時期でした。青年海外協力隊の試験もこっそり受けました。こっそり受けたので研究室の先生からは「なんでおまえ、黙って受けたんだ」と怒られたんですけど、その試験も受かりました。

帰国後から大学院時代に学んだことは中国語の便利さです。中国語って、本当にどこへ行っても使えるわけです。ニュージーランドへ行ったときも話したし、タイへ行ったときもアメリカへ行ったときも話したし、それこそインドネシアでも使ったし、本当にどこに行っても使えます。ものすごく便利だなと思って。中国語に強いということでいろいろな情報が手に入ったりしたので、ああ、よかったなと帰国後に知りました。

あとは、さっきも言ったんですけど、学ぶ楽しさ。大学と大学院にはいろいろな面白い人、いろいろな考え方をする人がいて、こんな考え方をする人がいるんだとか、こんな見方をする人がいるんだとか、その人たちから考え方を学んだり、人の学びから学んだりしました。そういうことがすごく楽しくて、「学ぶって楽しい」「知らないことを知るって楽しい」ということをこの時期に学びました。

⑪ 学歴と肩書—色々な生き方との出会い

もう一つ、「肩書なんてどうでもいい」と書いたんですけど、その時期、「京大の大学院生です」と言うと、それを言った時点で「あ、すごいですね」と言われることが多かったんですけど、えっ、何がすごいんだろうと思った。だって私のことを何も知らない。ただ名前を言っただけですよね。何がすごいんですかとすごく思った。そのときから違和感があって。

さっきいろいろな人と出会ったと言いましたが、いろいろな人の中には中卒で会社を立てて成功している人とか、大学に行かずに宿の経営をしてうまくマネジメントしている人とかいます。いわゆる学歴がない人たちでもすごく楽しんで、しかも成功してやっている。そういう人たちに出会って、肩書なんてどうでもいいなと思いました。京大に入って、学歴や肩書で人を判断するのは間違っていると強く感じました。いろいろな生き方があるということを見られた時代でもありました。京都には本当に面白い人がいっぱいいるので、案内するのでぜひ京都に来てください。いろいろな生き方をしている人が本当にたくさんいます。

⑫ 「自分次第」

最後は「自分次第」。大学院でいろいろな授業を取ったと言いました。ハードはハードなんですが、やろうと思えばできるんです。授業以外にも映像や写真のちょっとした仕事をしていて、タイムマネジメントが結構大変でした。でも自分次第でどうとでもなるんだということをすごく感じました。

これが帰国後から大学院までです。

⑬ 海外青年協力隊員として—インドネシア

そのあと青年海外協力隊の試験を受けました。日本語教師は結構青年海外協力隊の試験もあるので、もし興味ある人がいたら何でも言ってください。いろいろアドバイスができます。

試験に合格して行くことになりました。派遣された国がインドネシア。なぜインドネシアを選んだかというと、中国留学していたときにクラスメートにインドネシア人が 5〜6 人いて、彼らが結構私のことを誘ってくれた。彼らは分け隔てなく誰とでも仲よく和気あいあいとしている。壁がない。いつも笑っているんです。ヘラヘラと言ったらあれですが、明るい。なぜ彼らはこんなに分け隔てなく愉快に過ごせるのだろうと気になっていて、次は彼らの国を見たいなというのが心の中にあったので、インドネシアを選んで、そのまま希望が通ってインドネシアになりました。

インドネシアはあまり身近ではないかと思います。飛行機なら直行で 8 時間ぐらい。首都はジャカルタにあります。派遣先は東ジャワ州のスラバヤという第 2 の都市。日本でいう大阪みたいなところです。インドネシアはインドネシア語なので、派遣前は訓練所に入って 70 日間、ひたすらインドネシア語の勉強をしました。現地先でも 100 時間勉強して、そのあと派遣される形になりました。

インドネシアってこんな国。どこにもバナナが生えていて、マンゴーが生えていて、唐辛子が生えている。本当に豊かな国だな、この国で餓死すること

はないと思いました。パパイヤもあるし、それぐらい本当にいろいろなところに食べ物が生えています。イスラム教の国なのでモスクがそこら中にあって、1 日 5 回お祈りをします。アザーンといって、アラビア語での「お祈りの時間ですよー」という合図がいろいろなところで流れているんです。

（アザーンの音を流す）

清水　バナナも房ごと洗って食べるという感じです。

スラバヤはバリまで飛行機で 45 分ぐらいのところです。これがスラバヤ市の市章です。「スラ」はサメで「バヤ」はワニという意味で、昔、サメとワニとどっちが強いか戦った地と言われています。そういうところのアイルランガ大学の日本研究学科で日本語教育をしていました。学生の日本語能力向上とか、教員の日本語能力向上とか、日本文化の紹介をしてくださいと言われて行きまして、何ができるか分からないけど、とりあえず会えてよかったと思えることをしよう、出会えてよかったと思える人になろうということを意識してやっていました。

⑭ スラバヤで教えた日本語と日本文化

あとでビデオを見てもらったほうが分かりやすいと思いますが、スラバヤにいる中で見えてきたことがあります。それは本当に多くのというか、ほとんど全ての学生の夢が日本に行くこと。それが叶えたい夢だった。それと同時に、スラバヤには日本企業が結構進出していて、工場が多い。日本人の駐在員が 700 人ぐらいいて、比較的身近なところに日本人がいるのですが、「同じ地域に住んでいるのに、日本人と俺らには壁があるみたいでさびしいんだよ」と学生も先生も言います。「日本人ともっと交流したいんだよ」という声を聞いて、「ああ、そうなんだ。じゃあもっと違うことをやっていかないといけない。勝手に他人の土地に来ているのが日本人なのに、なんでこんなことを思わせているのか。それはいやだな」と思ったんです。

だから、その思いを達成できるようなことをしたいと思って、日本語を使う実践活動としてスラバヤの地図を作成しました。これを空港や各鉄道の駅とかに置いてもらって、日本人向けのスラバヤ紹介をしています。あとは体験。平均給料が月 3 万円とかですから、日本に行く航空券もなかなか買えません。日本に行けないのだったら、インドネシアでできる文化体験をしてほしい。そう思ったので、日本人の人たちに「要らない浴衣や着物を送ってください」とフェイスブックで呼び掛けて、10 着ぐらい送ってもらいました。あとは流しそうめん。竹を切って、そうめんは知り合いのラーメン店の人に「そうめんっぽいのを作ってください」と言って作ってもらいました。運動会をしたり、日系企業を巻き込んで日本祭りをしたりしていました。

（ビデオ上映）

清水　インドネシアの学生の様子が分かるんですけど、本当に生き生きしていて、やることが本当に楽しそう。楽しく学んでいました。

これは課題。年賀状を書かせたりもしました。で、プレゼンをしてもらいました。

折り紙をしたり。この写真は、先生たちに日本語の教え方を教えています。

（ビデオ）私も千恵と同じように一生懸命勉強して、必ず千恵に私が日本へ行くところを見せようと思います。

（ビデオ）笑顔の力、それは見た人を幸せにすること。そして一つの笑顔は、もう一つの笑顔を作ることだと思います。

清水　スラバヤは高知市と姉妹都市なので、毎年よさこい祭りをやっているんです。これ以後、もう 40 団体ぐらいになります。

（ビデオ終了）

清水　日本語が上手ですよね。あんな感じで日本語が好きで、日本の文化にもすごく興味があって、とても楽しく勉強しています。ビデオの中で弁論大会がありましたが、全国で 1 位、2 位になると日本行きのチケットがもらえるんです。日本で弁論ができるチャンスがもらえて、あとは日本の工場とかディズニーランドにも行けるというのがあって。1 年目は 1 位、2 年目は 2 位になって、2 年連続で学生を日本に行かせることができました。それもすごくうれしかったです。

⑮ 日本語教師・日本人として学んだこと

見たこと、知ったことなのですが、日本の見られ方。日本に憧れを持っている人がすごくいます。私の大学だけではなくて、日本語学科のあるところがほかにもスラバヤ市内に 4 校あって、そこでもコスプレイベントであったり、日本文化イベントであったり、学生たちが自分で企画してやっていました。それ以外にも生涯学習センターのようなものがスラバヤ市にはあって、そこで語学の家みたいなテー

マで毎週土曜日、日本語を教えていたのですが、そこでも小中高生から 60 歳のおばあちゃんまでが「日本語を学びたいから」といって受講しに来ていました。ああ、日本はすごく憧れを持って見られているんだなと実感して、うれしかったですね。だから、それになんとか応えたいというのがありました。

時間がないのでこれだけ伝えたいんですけど、これは何か分かります？

参加者　千羽鶴。

清水　そう、千羽鶴。インドネシアに着いて 2 週間ぐらいのときに日本語学校を見学したいと思って、本当に小さい、町外れの日本語学校を見学しに行かせてもらいました。その学校に入った瞬間に目に付いたのがこの千羽鶴で、「なんだろう、この大量の鶴は」と思って見ていたら、このビンの外に何か文字が書いてある。見たら「日本が早く復興しますように。日本が早く元どおりになりますように」と書いてあった。何かといったら、2011 年の 3 月 11 日に起こった東日本大震災。それを見て「自分にはこんなことしかできないけど」といって、新聞の広告や余った紙を使って、「日本が早く復興するように」「早く復活するように」「元に戻るように」とひたすら折ってくれたようです。これ以外にもあと 5 ビンあって、それも満杯になっていた。

そのときに、日本とインドネシアは確か 5000 キロぐらい離れていると思うんですけど、こんな小さなところでもそんなふうに日本のことを考えてくれている人、思ってくれている人がいるだと思って、すごく胸がいっぱいになりました。大して大きなことではなくても自分のできることをやっていれば、人を喜ばせることができるんだ、人のためになることがあるんだと思いました。手段はさまざまです。人それぞれですけど、目の前の人に耳を傾け、何に困っているか、何がしたいのかを聞いて、私のできることをやっていこうと。そういうことをものすごく実感した出来事でした。

⑯　現在の仕事と同僚

いまは立命館の附属中高一貫校で日本語を教えています。IB（国際バカロレア）コース（図 1・2）というところで、日本語以外を全部英語でやっていく授業です。IB の全教員は約 20 名。うちの日本人が 2 名だけ。共通言語は英語。会議もオリエンテーションもメールも全部英語でやっている場所にいます。最初のころはそんなに英語ができるわけではなかったし、中国語とインドネシア語を勉強するときに、ほかの言語は邪魔だからと、どんどん抜ける（笑）。どこかへやっちゃおうという気でいたので、英語は本当に抜けていたんです。だから最初は戸惑ったんですけど、いまはなんとか英語を使ってやっています。やっぱり楽しいです。いまはものすごく楽しくやっています。私の席の隣がウルグアイ人、左斜めがフィリピン人、目の前がイギリス人、右前がオーストラリア人、隣がカナダ人（笑）。すごいなと思います。その中でいろいろな違いもあって面白い人たちです。みんな背が本当に高い（笑）。「ちっちゃいなあ」とか言われながら楽しくやっています。

⑰　「当たり前」は、当たり前じゃない

これまで通して感じたのは、いまみんなが当たり前だと思っていることは決して当たり前じゃないということです。冷蔵庫があるのって、日本ではたぶん当たり前なんです。一家に 1 台というか、一人暮らしの家にもある。でも、インドネシアって冷蔵庫のある家が珍しいんです。本当にお金を持っている人しか持てない。コピー機も日本では研究室に 1 台とか、学部に 1 台とか、どこにでもあるじゃないですか。コピーで困ったことなんてないでしょう。でも、インドネシアは全学校の中でコピーするところは 1 個しかなくて、お金を取られる。それがビジネスとして成り立っているから。コピー屋さん。だから、コピーするのがこんなに大変なんだと思いま

図 1　IB コース　チラシ（英語版）

す。コピーのために授業に遅れることがよくありました。

日本には、時間どおりに動くことであったり、四季があることであったり、親しき仲にも礼儀ありというようなことがあります。これは中国で感じたことですけど、中国では親しくなればなるほど、なあなあになってくるんです。だから、「ありがとう」とか「ごめん」とか言うと、「なんだ、それ。水臭いからやめてよ」という感じです。でも逆に日本には「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるように、やっぱりそういうところは大事にする。そういうところも当たり前じゃないんだなということを強く感じました。いまはいろいろな交通手段が発達して、世界は近くなっていると思うんです。行きやすくなっている。でもやっぱり世界は広い。常識なんて国が変わればそれだけでも変わるんだなということが分かりました。

⑱ まず自分が動かなければ始まらない

これが結構重要というか、伝えたいことになるんですけど、私が大切にしていること、何かするときに心掛けていることは、自分が動かなければどうしようもない、まずやってみるということです。得たいものとか、これをやりたいなとか、きっとそういうものがあると思います。でも自信がなくてできない。そういうこともあると思うんですが、自信も経験もやりたいことも全部、自分で取りに行く。自信なんて待っていても得られない。自分がやらなきゃ。何かにチャレンジしていかないと得られない。欲しいものは全部自分で手に入れる。ためらっている暇があるなら、まずやってみる。やってみることで失うものはそんなにないんです。

やりたいと思っていることが少しでもあるんだったら、まずやってみる。私はそうしたいと思っています。やらなかったときの後悔ってずっと残ります。やって後悔するのは「こんなやり方では駄目だった」と分かるから実になると思うんですけど、やらなかったことの後悔は残る。私は「ああ、あのときこうしていれば」と思うのがすごくいやなんです。だから、まずやってみる。同じチャンスは二度とないということも常に頭に入れておく。これも大事にしています。

⑲ 思ったらまずやってみる

もう一つ、人間はやらない理由を探すほうが簡単です。言い訳もやらない理由を探すほうが簡単で、結局「やらない」を選んでいる人が多い。変わりたいと言っていて、変わらないことを選んでいる人が結構います。そうではなくて、思ったらまずやってみるというのが、私が心掛けていることです。

⑳ 「自分基準」で判断する

もう一つ、自分基準で判断するということです。人にどう思われてもいいから、自分がしたいと思うこと、自分にとっていいこと、自分が楽しめること、自分はこれで何かを得られるだろうということで判断をする。周りがこうだから自分もこうするとか、親がこうやっているから「ああ、そうなのか」とか、入学してそのまま 4 年で卒業するのが当たり前だから自分もそうするとか、何か別のものを基準に判断すると、やっぱりそっちに責任を転嫁してしまうし、自分が得たいものって得られない。だから、別にどう思われてもいい。私自身も北京に留学するときに、1 年休学したら学年が 1 個遅れてみんなと一緒に卒業できない。それってどうなんだろうと思ったのですが、そんなのは社会に出たら関係ないし、別に 1 年遅れて卒業したところでその関係性はなくならないし、どうでもいいやと思いました。年齢とかも関係ない。だから本当に自分がやりたいと思ったら自分で判断する。自分でやると決める。それは大事にしたほうがいいと思っています。

㉑ 今いる世界だけが世界ではない！

あとは、自分が今いる世界だけが世界ではないということ。これも常に心に留めています。例えばいまサークルで仲間内と過ごしている。そこが自分のいる一つの世界になっていると思うのですが、もしかしたらそこは、ほかの子から見たら異常だったりするかもしれない。当たり前のことがほかで見たら、実は大したことではない、当たり前のことじゃないとか、あると思います。だから、自分がいまいる世界だけが世界ではないということは常に頭に入れておいてほしいと思います。私もまだまだ狭いところにいるので、どんどんいろいろな世界を見ていきたいと思っています。

㉒ 相手の言葉で話すと相手の心まで届く

最後に私の好きな言葉です。調べてもらうといいのですが、ネルソン・マンデラという人が言った言葉です。「相手が理解する言葉で話せば、言葉は相手

の頭まで届くだろう。でももし相手の言葉で話したら、言葉は相手の心に届くだろう」。本当にそのとおりだと思っています。例えばいま私たちは英語が話せて、英語で会話をしたら理解はできます。でももし日本語で話してくれたら、理解するかもしれない。相手の言葉で話すことで相手の心に伝わるものが変わってくるので、私はできる限り相手の言葉で話したいですし、そういうコミュニケーションを大事にしていきたいと思っています。

㉓　自分の経験をつぶやく・つなげる

最初に言いましたが、これはあくまで私が経験したことで、同じ場所に行って同じことをしても、たぶん同じ経験というのはないです。同じ人にも出会わないし、同じものも見ないと思います。皆さんはきっと海外に興味がある方たちだと思うので、皆さんが出会ったこと、感じたこと、見たことを「#海を渡って～」とかでつぶやいてほしいと思います。そうしたら私自身も、ああ、こんな経験があったなとか分かるので、そうやってつながっていってほしいと思います。

㉔「許し合う」「分かり合う」文化

最後に、この言葉は何語か分かりますか。インドネシア語の「ありがとう」。インドネシア語の「ありがとう（Trima kasih）」を直訳すると、trima＝受け取れる。kasih＝愛。Banyak＝たくさん。「ありがとう」は「たくさんの愛を受け取りました」という意味なんです。sama-sama が「どういたしまして。お互いさまですよ」、kenbari は「返しただけですよ」の意味です。「愛を受け取りました」「いえ、返しただけですよ」。そのやり取りがとてもいいなと思って。インドネシアは「許し合う」「分かり合う」というのが非常に根付いている国で、それがこの一言に入っているなと思って、好きな言葉なので紹介しました。言語を学ぶということは言葉に入っている文化、人柄、習慣も学べるので、言葉だけではなくて、ぜひその国の背景などもいろいろ学んでほしいなと思います。以上です。

(3)　質問タイム＝ゲストスピーカーを囲んでの懇談会

参加者：
ゲストスピーカー　清水千恵さん
創生学部 2 年生 6 名
創生学部 1 年生 2 名
教育学部学習社会ネットワーク課程 3 年生 2 名
教員（オブザーバー、キャリア創生研究会メンバー4 名）

＝参加者の自己紹介と質問＝

この時間には、各々の参加学生からの自己紹介と質問および双方向でのやりとりがなされたが、紙幅の関係により、その中から、いくつかの質問と回答を、懇談会の流れに沿って抜粋して紹介する。

〇留学経験と就職　―　自分の強みを活かす

質問①　留学で身に付けた中国語は、就職の際、どのくらい強みになりますか？

清水　言葉ができることだけだとあまり強みじゃないと思うんですよ。確かにいまはまだ中国語ができる人が、増えてきてはいると思うんですけど、例えば中国人留学生が日本企業を同じタイミングで受けたときに、「中国語ができます」と言って、「私もできます」と言ったときに、同じ土台に立ってどっちを採るかと言ったら、たぶん中国語も日本語もできる日本人、というか中国語がネイティブレベルで話せる日本人ちをとるんですよ。だから、もう一つなにか、語学はあくまでも使うものだから、プラスなにかを持っていることってものすごく大事。自分の強みを知っておくことってすごく大事だなと思います。

だから、それこそ「僕は中国語もできます。それに、中国人の説得の仕方も知っています」とか、「中国人の文化を本当によく分かっているので、なにか交渉がうまくいかなかったときに、僕は緩衝役になれます」とかというのがあると、ああ、こいつは使えるだろうなと。なにか交渉のときに一役買ってく

写真４　懇談会の様子

れるだろうなと思わせると思う。それがたぶん重要。だから、文化を学ぶことはものすごく大事で、それをアピールできるくらいまでになっておくことが大事だと思う。

英語もそう。英語がしゃべれる人は、相当いるんですよ。だから、「英語がしゃべれます」だけだったら、たぶんこれから先は全然強みにならない。英語プラスなにか。だから、英語には無関係です。だから、私はこういうところに役に立つと思いますとアピールができる人になってほしいなと思います。

事前に印刷してもらったチラシ（図 1・2 参照）を見てもらうとわかるけど､私がいま教えている IB というカリキュラムで、そこで理想とする学習者像、こういう人たちをカリキュラムで育てたいというものですけど、この要素は結構重要だと思います。

これを全部身につけるのは相当難しい。そんなに完璧な人間はいないので。でも、その中でいま自分がこの 10 個の中で、ここは強いなと思うところとか、ここはないなと思うところを把握しておくことはすごく大事です。

○自分の強みと弱みを知っていることの強み

自分の強みを分かっていること、自分の弱さを分かっていることはものすごく自分を説明するときに生かせるので、参考にしてほしいなと思い、これをプリントしました。だから、自分はこういうところが強い、だからここを伸ばしていくとか、こういうところが弱いからここをもう少し伸ばせるようにしようとか、僕はこれができるけど、これはできないからこっちができる人と一緒に組んでなにかやろうとか、そういうふうに自分を分析することもいまのうちにやっていたら強いと思います。

図２　IB コースのチラシ（日本語版）

○非言語コミュニケーション

質問②　中国で韓国人の方とルームシェアしたとき、最初どうやってコミュニケーションをとっていましたか？

清水　もうジェスチャー（笑）。本当に。あと、ちょっとつたない英語みたいな。最初、本当に私できなかったから。もうほぼ話もしてなかったかもしれない。最初は。だんだん分かるようになってきて、話せるようになってきて、やったーという感じでした。

○キャリアとしての教師と青年協力隊員

質問③　先生になろうと思った動機について、教えていただきたいです。

清水　私は日本語教師になりたかったんです。その前に、それこそ小学校のとき、2 年生とか 3 年生ぐらいのときに日本ってなんて狭い国なんだ、みたいに思った。なんだ、この国はって。すごく嫌だったんです。人間関係とか。なんでこんな女子……、女子のいわゆる面倒くささ。こんなん面倒くさいだろうと思っていて、もうとにかく海外に行きたかった。

ほかの国を知りたくて、海外で働きたいと思っていたときに、英語の先生が「私はオーストラリアで日本語を教えるから教師を辞めます」と言って辞めていったんですね。そのときに、日本語教師という職業があると知って、日本語教師になればいろいろなところに行けると思って、日本語教師になりたいと漠然と思っていて。で、中国に留学して、日本語を教えてと言われる機会が多くて。教えているのが楽しくて、日本語教師になろうと思ったんです。それがきっかけで日本語教師になりたかったです。

質問④　青年海外協力隊は、なにか自分の特技とかを持っていないと行く意味とかないですか？

清水　いや、いまいろいろな職種があって、それこそ薬剤師とか看護師とかはちゃんと専門性を持ってやるものなので、なかったらできないんですけど、青少年活動とかコミュニティー開発という職種

があって、それはその土地でコミュニティーを作るとか、青少年活動というのはそこの場所で求められていることに対して方法を考えてやっていくみたいな活動なんです。

なので、特にこれができるからこれというわけではなくて、青少年活動とかは割と広いので、そういうところでも応募できると思います。青少年活動、コミュニティー開発かな。

教職は、小学校教師とか理数科教師とか、あとなにがあるかな、そういう教師の派遣もあるんですね。体育とか。だから、そういうのでもできると思うし。やはり自分の好きなことがあると思うので、できることはたぶん結構あるんですよ。自分ができないと思っているだけで。だから、そういうのをちょっと見つめて、あと職種を見て行ってみたらいいと思います。

○アジアの国々と日本人としての自分

質問⑤　実際中国やインドネシアなどアジアの国々に日本人として行って、よかったなとか思ったことはありますか。

清水　アジアは私、一番面白いなと思います。結構アメリカとかニュージーランドとか先進国にも行きましたけど、面白いのはアジアだなと思って。それはなんでかというと、やっぱり違うから。なんて言ったらいいかな。全部が知らないこと、いちいち目にすることが新しいことだったり、触れるものが新しいものだったり、自分の知らないことを知ることができるというのがすごく私はわくわくする、楽しい。それがすごく感じられるので、アジアは楽しいなと思います。

結構ね、日本人を見たら「ホンダ」とか「スズキ」とか「サムライ」とか知っていることを言ったりする。反日感情があるところもありますけど、友好的に見てくれる人も多いから、そういう人たちとコミュニケーションをとるのも楽しいし、結構話しかけてきたりもするし、そういうのが楽しいから行ってみてください。

○「やったもん勝ち」―「口に出す」効果

清水　恩師としゃべっていて、本当にそうだよねと。とにかく、やったもん勝ちなんだよ、人生って。誰がどう思おうと、自分一人の人生じゃないですか。別に誰がどうこうしてくれるわけでもないし、たとえなにか失敗したとしても、誰かに迷惑をかけることでもない。ものによると思いますけど。

だから、できることはやったほうがいい。やったもん勝ちだと思って、これやりたいな、迷うな、でもやったもん勝ちだというふうに常に思って行動してほしいと思います。どんどん元気よく毎日楽しんでいれば、きっといろいろなことが楽しく回っていくんです（笑）。あと、口に出すこともすごく大切です。やりたいこととか、欲しいものを口に出すと実現する率がガンとアップするんです。それこそ流しそうめんとかも、「流しそうめん、やりたいんです」と言ったら、あるとき友達が竹を切ってきてくれたんですよ。それでもうやらざるを得なくなったとか、本当にお祭りとかも「やりたいんです」と言っていたら、じゃ、僕はこういうことができるとか、こういう人を紹介するよといってどんどん回っていくんですよね。

口に出すことで、どんどん協力者が増えたり、やれるチャンスが増えたり、つながりも増えるので、思ったらまず信頼できる人とか、ばかにされない人、「フン」みたいに思われない人を見極めて言っていくようにすると、すごく可能性が高まると思うので、口に出してどんどんやっていってほしいなと思います。頑張ってください。

写真５　参加者からの活発な質問

写真６　合間の和やかな雰囲気

(4)　さらなる懇談タイム

一部の学生は授業出席のため退出したが、残りの学生はさらに、ゲストとの熱心な質問とやり取りを続けた。

○日本語教師までの道のりは？

質問⑥　ずっと日本語教師になりたいと思って来て、結局かなえられたときに、一番強く思っていたこととかはありますか。

清水　私も大学を選ぶときに、専門で日本語教育を学べるところに入ろうと思っていたんです。でも、受験勉強が嫌になって (笑)。センターの配点が高いここにしたんですけど。でも、なんだろう、やりたかったから。日本語教育の授業をこの大学は提供されているじゃないですか。いまもあるのかな。教養で日本語教育論が A、B、C で私のときにはあったんですよ。いまはないのかな。だから、1 年のときにそれを全部とっていたんですよ。

それで、とっていてやっぱり楽しいと思たから続けられたけど、やっぱり先生がそういう苦い反応をするのもすごくよく分かるんです。ただ、そうならないための私のアドバイスとしては、日本語教師って待遇がめっちゃ悪いから、本当に待遇はめっちゃ悪いからいい仕事では決してなくて。ただ私がいまこの IB コースに入れたり、いろいろないい待遇で入れている。それはなぜかというと、教員の免許も持っているからなんですよ。

だから、いまほとんどの日本語教師は日本語教育能力試験しか持っていないんですよ。養成講座のやつしか持っていない。だから、教えられるのが日本語学校しかない。だけど、教員免許を持っていると、文科省の公立の学校もそうだし、私立の学校もそうだし、教えられる場所が広がるんです。だから、日本語教師の中でもちょっと強いんですね。持っていることが強みになっていて。だから、とれるんだったら国語の免許も日本語教師になる上では持っていたほうがいい。これは絶対 (笑)。仕事を得られる確率もそうだし、求人の量も全然違うから…。と言っても、私も実は、国語の教員免許をとったのは大学院の時だけど。

質問⑦　日本語の教員免許は、いつ、どちらで取られたんですか？

清水　4 年の 9 月。帰国してから。私はもう一本、独学で日本語教育能力試験を受けました。でも、これはめっちゃレアだと思います。範囲がめっちゃ広いんです、日本語教育能力試験って、独学じゃ無理と言われているんです。合格率は 20%で、結構狭き門。合格させてくれないものなんですけど、でもそんな養成講座に通っているお金もないし。通うのが一番早いのは早いんですけど、養成講座に通ったところで能力試験に受かる保証はないんです。

だから、私は帰ってきて、国際センターの日本語教師の先生たちに、日本語教育能力試験の対策方法を教えてくださいと言って、夏休み中に講義と補講してもらって受かりました。でも、記念受験から、これは駄目かなと思っていたら受かったから、頑張ればいけますよ。勉強したのは 2 カ月くらいです。今からやっておくほうがいいですね。

○今、日本で働く理由は？

質問⑧　日本は海外でも教えられるのに、敢えて日本で教えるようになったのは、なぜですか？

清水　でも、私、逆に日本も見てみたかったんです。日本での社会経験がないから、日本ってどうなんだろうと。しかも、日本の教育はいまいろいろ言われているじゃないですか。現場はどうなんだろうと。現場の先生たちって本当にやる気がなくて、本当に駄目なのかを見てみたくて。

あと、日本語教師は、日本語を教えるときも日本語だけではなくて、マナーとか日本の仕事の仕方とかも教えるべきなんですね。日本で働きたい人に対しては。でも、自分が知らない。日本で働いたことがないから。だから、見てみたいと思って。

本当は、私もアメリカに行くつもりだったんです。インドネシアから帰って。でも、そのアプライをしようとしているときにこの求人の話が入ってきて、これに受かったらそっちへ行って、これに落ちたらアメリカへ行こうと決めていて、でも合格したからそういうことになった (笑)。だから、どっちも見てみたかったから、そうしました。でも、あと何年後かにはたぶんどこかへ行っていると思う。

○留学中の中国語の学び方は？

質問⑨　留学に行く前と行った後では、中国語の勉強方法はどう変わりましたか？

清水　私、行く前は、中国語は勉強していないです。ノー勉強でも、結果として行けちゃったんですよね。(笑) 行く前は本当にしなかった。それで、授業を受けた 1 日目にヤバいと思って、そこからひたすら勉強。それ以外することもないし。だから、空

き時間は、ずうっと勉強（笑）。

質問者：中国で買ったテキストを使ってガリガリやった？

清水　学校で配られているテキストとか。私がよくやったのは、ピクサーが好きだからピクサーの映画を、中国は海賊版がめっちゃ売られているから、ありとあらゆるものを買ってひたすら流しておく。それで中国語字幕、中国語音声で聞く。そうしたら、内容は分かっているから、こういうときにこういう表現をするんだとか、耳が慣れてくるというのをやったりしたし。

あと、中国語に関しては、発音はばかにできない。初め行ったときは通じればいいや、発音なんてどうでもいいやと思っていたんですよ。そんなにケアできるほど中国語を知らなかったし。だけど、半年ぐらいたったときに、私は結構からかわれるタイプだから、からかい混じりに韓国人のクラスメイトに「おまえの発音は変だ」と言われたんですよ。「おまえの発音なんだ、それ」みたいな。そう言われたときに「なんだ、この野郎」と思って（笑）。でも、それでハッとした。

○何語で考え、頭をどう切り替える？

質問⑩　清水さんは、英語とか中国語とかインドネシア語とか、日本語をはじめとしていろいろな言語を話せるじゃないですか。そのときに、思考はどうなっているのかなと思って。例えば、もちろん日本語だったら日本語で考えるじゃないですか。中国語の場合は中国語で思考したりとか、インドネシアの場合はインドネシア語で思考したりとか。英語の場合は最近本格的にやり始めたからまだ分かんないですけど、その言語を使っているときはその言語で思考したりしているんですか。

清水　そうだと思います。ほかのものが入っちゃうとできないかな。日本語で訳していると、おかしくなってくる。混ざってしまうので、なんとなく頭の中を説明すると 3LDK の部屋があって、LDK は日本語なんですよ。それで、インドネシア語、英語、中国語の部屋があって、閉じておくんですね。普通のときは。日本にいるときは。だけど、中国語を話すとなったときは、中国語の部屋を開けるんですよ。

質問者：日本語はシャットアウトして？

清水　いや、日本語はある。日本語は行き来できるようにしてある。でも、開けるようにして、そうすると中国語だけの部屋と日本語の、ちょっと本当はいけないんですけど、中国語を使えるように切り替えるようにしています。

でも、いきなり、例えばここで中国語をしゃべっています、インドネシア人が入ってきますとなったときの切り替えはめっちゃ難しい。混ざりますね。だから、立て付けの悪いドアみたいな。

質問者：学ぶ言語で思考するようにするためには、出だしの勉強であまり日本語を介さない、中国語は中国語のまま学ぶみたいな、彼のように日本語を全くシャットアウトして、中国で日本語を介さずに中国語として学ぶみたいなやり方で最初は学んでいったほうが、そういう思考になりやすいとかはありますか。

清水　どうかな。でも、私も中国語に関しては直接法。中国語で中国語を習ったから、自然と思考がそうなっていて。でも、勝手にたぶんなるのかなと思うんだけど。

質問者：思わず「トイ」（はい）ってでちゃうことはありますか？

清水　英語をしゃべっているときに、「トイ」ってめっちゃ言いやすいから、出たりする。「イエス」って、アメリカとかで言われて「トイ」みたいな。それぐらいやっぱり言いやすい言葉は出てきちゃうんですよね。インドネシア語も can というのが bisa って言うんですけど、それがめっちゃ言いやすいから、中国語の中に bisa が入っちゃったりというのがあって。だから、たぶんそれぐらいには留学したらなるんだよね。日本語の単語を思い出せないみたいな。…だから、行ったら自然と日本語で思考しないようになると思います。

写真 7　さらに熱心なやり取りが…

○現地の人と日本人との「壁」とは？

質問⑪　スライドの説明中で、インドネシア人の感想で日本人と壁があるようで寂しいとおっしゃっていたんですけど、壁があるようで寂しいというのは、日本人のどういう国民性から来ると思いますか？

清水　いまは企業が安全性も考えて、社員を派遣しているから、なにかあったら企業としても困るんですよね。だから、安全面を考えてちょっと隔離するというのもあるし。でも、やっぱりちょっと上から目線の人たちもいるんですよ。

私はすごく嫌いなんですけど、それは。インドネシアにいるけど、現地のことを知ろうとしないというか、入り込もうとしないというか、そういう傾向が特に駐在の奥様方とかに強くて。スラバヤには日本人学校もあって、昔は誰でも参加できた。盆踊りとかイベントをやったときに誰でも参加できたんですけど、いまは日本人しか参加できなくしちゃったんですね。安全面もあると思うんですけど、そういうことを知っているインドネシア人たちが、同じところに住んでいるのに、日本人はこっち、インドネシア人はこっち。インドネシア人が「本当に昔の黒人と白人の世界だよね」と言うのを聞いて、なんか悲しいなと思って。

交流したいという人たちも多いんですけど、手段が分からないという人たちもいたんですよ。だから、お祭りが一つのきっかけになればいいなと思って作った感じですね。

○一人だけで、どうやり遂げたか？

質問⑫　その祭りって、清水さんが主催で運営していたんですか？

清水　そうそう、そうです。代表になって、日本人会とか領事館とか、ありとあらゆる日本の機関に「こういうことがしたいんです」と言って。でも、大変。嫌な思いというか、苦しい思いがあったり。最初、日本人会のトップの人のところに「こういうことをしたいんです」と言ったら、負担になることはやめてくれと一蹴されたんですよ。それぐらいやっぱり、仕事もあるから。

質問者：実現までにはどれくらいかかったんですか？

清水　たぶん 8 カ月ぐらい。4 月ぐらいに始めて、2 月に開催した感じですかね。その前からちょっとずつ種をまいたというか、口に出して言っていて、いざ動こうとなって、でも本当にスポンサーも集めないといけないし、あと動く部隊を作らないといけないけど、まとめるのも動かすのも大変だったし、日本人会は協力してくれないし、日本企業は相手にしてくれないし、みたいな。

でも、ジャカルタ新聞という、現地の人は大体読んでいる新聞があって、その記者の人とつなげてもらって、新聞にスポンサー募集というのをどでかく載せてもらったんです。そうしたら、企業から電話が入るようになって、スポンサーを獲得して、こぎつけたという感じです。

○海外活動が希望通りでない場合は？

質問⑬　青年海外協力隊は、高校のときに行く国は自分で基本的に選べないと聞いたのですが、その点はどうでしたか？

清水　希望どおりになることってほぼない。だから、私も珍しいほうです。でも、どう捉えるかによるのかな、と私はすごく思います。全然希望していない国だけど、ここになった、じゃ、これはなんか縁があるのかなとか、引き合うものがあったのかなというふうに捉えたら、結構前向きに考えられて受け入れられると思うんですね。

だけど、全然希望していないのになんでここなの？とか、こっちへ行きたかったのに全然わけ分かんない言語をしゃべっているし、わけ分かんない国だしと考えていたら、前提がそれだから全部入ってこないですよね。本当はおいしいかもしれないのに、嫌だというのがあるからまずいとか、そこでバイアスがかかってしまうというのはあると思うから、捉え方次第かなという。

本当に前向きに考えればいいことは多いけど、ネガティブに考えたらマイナスしかないから。だから、もし青年海外協力隊に参加するとなって、希望どおりにならなくても、ここと私は縁があるんだなというふうに捉えてほしいなと思います。ほぼ周りも通ってないです。

○海外青年協力隊への参加を振り返ると？

質問⑭　青年海外協力隊の 2 年間で、一番苦しかったことは何ですか？

清水　やっぱり留学と仕事は違うんですよね。留学は全部ベクトルが自分だから自分が決められる

し、自分でコントロールできる。でも、仕事は相手がいて、一緒にやる人がいて、自分の思いどおりにできないんですよ、全部。だから、コピー一つとってもね（笑）。だから、そこでこうしてほしいのになかなか進まないというのは結構あって。

あとは、私の職場は大学だったけど、大学教員って結構プライドの高い先生とかもいて、その中で私は一番若くて、だから私からなにか言われることが嫌な先生がいたんですよ。それで、私に対して上から試してくるみたいな人もいて、その先生と結構ぶつかって。本当にやり合って（笑）。そういうときとか、お互いにずっと平行線のときがあって、そのときは結構苦労しました。

でも、私はこの学科のことを考えたらこうしたほうがいいとか、日本人会とつながり作ってもっとコミュニケーションできるようにしたら、学生たちにとってもいいとか考えていたけど、日本人会とその先生がぶつかったりとかというのがあって、なんで？となったときは。

質問者：帰ってきた時に、あの時もっとこうしていればよかったとか、あれができなかったとか後悔はしましたか？

清水　帰ってきて「あれをやればよかった」というのはなかったです。本当にやりたいことをやりきったんです、本当に。本当に帰るときは燃えつき症候群というの？（笑）　本当に燃え尽きたという感じだったんです。

そのぶつかったときに、こうしておけばよかったなというのは、その先生のことを信じてなかったんです。私も知らず知らずのうちに上から目線になっちゃっていた。これはできないだろうなとか、これはきっと難しいから無理だろうなというのを思っていたから、やる前に口出しちゃったり、こうしたほうがいいですよってやる前に言っちゃって、カチンとこさせてしまった。

写真８　質問に応える清水さん

そうではなくて、やっぱり失敗してもいいから信じて見守ることもすごく大切だなというのを思って。それ以降はそうするようにしました。信じることと見守ることも大切だなというのをそのときに思いました。

質問者　行く前と行ったあとで、なにか考え方が変わったというか、得られたものはありますか？

清水　それこそいま言った見守ること、信じることはちょっと考えが変わって、知らず知らずのうちに上から目線になっていることがあるというのを思い知ったし。

インドネシアで学んだことがもう一つあって、許し合うこと。インドネシアって Tidak apa-apa という言葉で語られるんです。どんな国かっていうと Tidak apa-apa は大丈夫という意味なんですけど、何があっても Tidak apa-apa で終わらせる。自分が悪くても Tidak apa-apa、相手が悪くても Tidak apa-apa。でも、その根底にあるものって基本的に許すんです。それは、イスラムの教えでもあって、自分も迷惑をかけることがあるから、相手のミスや相手がしたことは許そうというのがあって、それが本当に根付いているんですね。それって、日本社会にはないなと思って。寛容性がない。

質問者　清水さんにとって、「寛容性がない」というのは？

清水　人のミスに対してはむちゃくちゃ厳しい。人のちょっとした失敗とか失言とか。「大丈夫」みたいな。それで捉えられたらもっと優しい、生きやすい。生きづらさはそこが一つあるのかなとすごく思いました。許し合うことも大切だなって。

５　振り返り―2 つのアンケートから

以上、跡づけてきた学生主体キャリアイベントは、2018 年 2 月の男女の働き方に関わる取り組みに続き、2 回目の試みである。サポートする教員の立場から、学生の意識や受け止め方、その影響力などを知る手がかりを得たいと考え、参加学生用・主催学生用の二種類の質問紙を、教員側が準備して実施した。

参加者アンケートの対象は、創生学部の参加学生全員であり、主催側のメンバー4 人も含まれている。両アンケートともに、質問紙の最後に、以下の調査協力への意思確認の設問を設けた。

この結果、参加者アンケートは 6 人、主催側学生アンケートは 4 人と、回答者全員から同意を得ている。以下、これらの回答を設問ごとにまとめて掲載する。なお、学生の名前はアルファベットで示しており、同一アルファベットは同一回答者を示す。

(1) 参加者アンケート

まず、参加学生向けアンケート（図 3）では、海外への関心の度合い、事前のイベントへの期待、参加してみて印象に残ったこと、気づいたこと・考えたこと、今後に向けてもっと知りたいこと、その他の感想を尋ねた。設問ごとに概観する。

設問１　あなたの海外への関心について教えてください（語学・旅行・留学・将来の仕事など）。

A. 大学在学中に中国留学をして、将来中国語を活用できる仕事に就きたい。

B. 留学してみたい。

C. 留学したいと思っています。旅行も好きです。将来は海外と関わりがある仕事がしたいと思っています。

D. 私は、現在中国に関心があり、中国語の勉強をしている。来年度からの中国への留学も考えており、将来は、何らかの形で中国語を絡めた仕事も一つの道として考えている。

E. 短期留学でカナダに行く予定。在学中には海外をたくさん旅行したいと考えている、春休みはイギリスに行くことを計画中。将来の仕事は何らかの形で国際的なことができればいいと考えているが海外で働きたいという強い意志があるわけではない。

F. ヨーロッパに旅行に行きたい。もう一度留学に行きたいまたはワーキングホリデーで海外に行きたい

このように、回答者は何らかの形で、海外での活動や仕事に関心を抱いており、6 人全員の回答に「留学」が挙げられている。

２　あなたはこのイベントに何を期待しています（いました）か？

A. 留学への意識、何故一か国のみでなく、二か国に訪れたのか。

B. 留学に対するモチベーションアップ

C. 留学や青年海外協力隊の経験について聞くこと。

D. 実際に海外に留学に行った方の生の体験を聞けること。また、新潟大学の卒業生としてのアドバイスをもらうこと。言語認識や習得法についての質問をすること。

E. 留学先でのモチベーションや過ごし方を参考にしたい。

F. どのように言葉を学び、身に付けたらよいか。海外の人々と触れ合って感じたことを聞きたい。

本イベントへの期待は、留学や海外青年協力隊に関わるゲストの経験／体験、そこに関わる準備やノウハウ、これらを踏まえたゲスト自身の意識や感じ方、考え方などについて、ゲストに直接に質問したいという思いだったと、まとめられよう。

３　参加してみて、特に印象に残ったことは何ですか？

A. 「自信は自ら身につけるもの」「ためらう暇はない」

B. 日本嫌いな中国人とのエピソード

C. 主体性の重要さを改めて感じました。

D. 清水さんのやると決めたことに対して何が何でも進んで進んでいく姿勢。また、留学先での人との交流や経験が、互いの国同士の認識を変えたという話。

E. 与えられたチャンスをものにするという意志が強く、留学中は日本人とあまりつるまないというところや日本に帰らなかったところ。自分の目で見て感じたものを信じるという姿勢。

F. インドネシアの人々から日本が憧れであること。千羽鶴を折ってくれる心優しい人たちがいること。とにかくチャレンジすること。

印象に残ったこととして、5 人がゲストの意志の強さや主体性、チャレンジ精神など、3 人が、現地の人との交流や経験に関わるトピックを挙げている。

４　気づいたこと・考えたことなどを教えてください。

A. 事前学習よりその時どれだけ学習しているかの方が大切。学ぶ姿勢が力に直結する。

B. 日本人だけど地球に住んでるって考えたら日本だけにいるのはもったいない！

C. 自分がしたいことは何なのかを考えさせられました。理由なんてなんでもいいのかなと思いました。ちょっとしたきっかけが大切だったりするんだろうなと思いました。

D. 清水さんの講演を終えて、ますます留学に行きたい気持ちが強まった。留学の意義として、語学力の向上はもちろん、未知の環境や考え方に触れることで自分を成長させることも大きな意義だと再認識した。

E. 元々の力があまりなくても努力次第で周りの人を超えるくらい成長できると知った。
F. また海外にいって日本以外の文化に触れたい。外国の人と話したい。

気づきや考えたこととして、留学の意欲や意義に触れている者が 4 人（B・C・D・F）、学ぶ姿勢や成長に向けた努力の重要性を意識した者が 3 人（A・D・E）であった。

５　今後に向けて、もっと知りたいこと・考えたいことは何ですか？
A. 留学システム、今の新潟大学（＋創生学部で行くには）だとどれくらいの資金で行けるか。
C. 就職活動での留学経験のアピールの仕方、青年海外協力隊に参加するならいつがいいか。
D. 中国へ留学する場合、向こうで語学以外に何を学ぶないしは研究することが出来るか考えなければならないし、考えていきたい。
E. 特別な活動以外の海外での普段の過ごし方。文化含め、細かい部分。
F. 南米やヨーロッパなどの国のことや人々のことも知りたい。海外に誇れる日本のよさとは何か。

回答者 5 人のうち、3 人がこれからの留学に関回答者 5 人のうち、3 人がこれからの留学に関わる経費や留学生活についての情報収集、1 人が留学後の就職や海外青年協力隊に関わる情報収集、1 人が海外事情や「日本のよさ」の探求を挙げている。

６　その他、感想など自由に書いてください。
C. 私は一時は長期留学を諦めていましたが、留学したいという気持ちを思い出すことができました。
E. とても中身の濃い時間だった。自分なりの考えをしっかり持っている方でぜひ私も姿勢を参考にしていきたいと感じた。

以上の回答から、本イベント参加者は大枠として、留学や海外青年協力隊などへの関心を抱き、それらの経験やそこでの意識や感じ方、考え方、および実際の準備やノウハウなどについて、ゲストから話を聴き、直接に質問したいとの思いで参加したことがわかる。実際にゲストの清水さんのお話を聴き、やり取りをする中で、清水さんの意志の強さや主体性、チャレンジ精神などに刺激を受け、また現地の人との交流や経験に関わるトピックに心を動かされている。その経験を通して、参加者は留学の意欲や意義を再確認し、また自らを振り返りつつ、学ぶ姿勢や成長に向けた努力の重要性を再認識している。イベント後は、留学に関わる経費や留学生活、留学後の就職、海外青年協力隊などの情報収集を行いたいと考え、またさらなる海外事情や、国際的視野から見た「日本のよさ」への探求を挙げている。

6 の自由回答に見られるように、本イベントは「とても中身の濃い時間」と受け止める声もあり、その効果は、C の「諦め」から「留学したいという気持ちを思い出す」ことへ、E のゲストの「姿勢を参考にしていきたい」など、「これから」に向けた意識の変容にもつながっている。

(2) 主催学生アンケート

企画・運営を担当した４人の学生へのアンケート（図 4）では、終了後の率直な感想や印象に残ったこと、イベント実施前後の自らの変化の有無、主催側を経験したことの自分にとっての意味、予定通りに運んだ点・運ばなかった点、「次回」への改善案、その他の感想・意見などを、少し長めの文章で尋ねた。設問ごとの回答は、以下のとおりである（下線は渡邊）。

１．まず、今回のイベントを終えての率直な感想を聞かせてください。特に印象的だったことや学んだ実感が残ったことを教えてください。

L：とにかく、もう一度海外に行きたいという気持ちが強くなった。清水さんの経験を聞いて、海外の魅力をとても感じた。頭ではわかっていたが、<u>自分と価値観やバックボーンが違う人たちとの経験を聞けたことが印象的</u>でした。日本が嫌いな人がいたり、はたまた日本にあこがれを持っていたりなど様々な人と関わってきたことが伝わってきて、私も海外で様々な人と出会えたらいいなと思った。

M：期待以上の内容でした。<u>常に積極的な清水さんの生き方</u>がとても印象に残っている。これから語学留学で一ヶ月カナダに行く私には<u>向こうでの過ごし方とか姿勢とか参考になるものばかり</u>だった。青年海外協力隊での活動内容はやっぱり語学留学でできるような活動とは違っていて、なかなか聞けない話だと感じた。

N：今回、清水さんのお話を聞き、実際に海外で留学、活動をされた方の生の体験談を聞くことが出来、とても良い刺激になった。また、清水さんは<u>新潟大学の卒業生というこ</u>

ともあり、海外というものをより身近に感じられるようになった。現在留学を考えている私にとって、留学先での体験や注意点などが知れたので良かった。講演の中で特に印象的だったのは、清水さんが中国に留学していた際、元々は日本人が嫌いだった中国人の友人が、清水さんと話していく内に、全ての日本人が悪い奴ではないと日本人に対する見方が変わったという話だ。留学というのは単なる言語習得だけでなく、異文化やそこで出会った人の様々な考え方に触れ、理解し合うことでひいては国家間の友好に繋がっていくものだと感じた。

O：ゲストスピーカーの清水さんの、明るくてポジティブで行動力もあって周りの目を気にしない、という人柄が長期留学や青年海外協力隊などの経験に繋がっているように感じました。私も興味があることに対しては受け身にならずに積極的に関わって行こうと思いました。

２．今回のイベントに関わる前、および主催側として関わった後で、海外留学や海外での仕事・活動などについてのあなた自身の意識や考え方、価値観などに変化はありましたか？あるという場合には、事前と事後でどんな違いがあるかを教えてください。特に変化のない場合には、今の考えを教えてください。

L：基本的には変わってはいない。ただ、あくまで想像やぼんやりとしていた意識がより明確になった。海外留学や活動をすることに関してあまり不安はないが、事前の情報集めが大事になってくるという印象があり、準備期間がしっかり必要だと思う。
話を聞く前もあとも海外にいって活動してみたいという気持ちです。あとはやはり行ってみないとわからないことが多いと思っているので、実際に行きたいという気持ちが強くなった。

M：カナダに行く予定があったので以前から漠然と頑張ろうという気持ちはあったが、日本人とつるんでいたら全然成長しないという意見を聞いて確かにそうだなと思ったし、積極的に話していくことが大事だと感じた。なので、今まで周りの目を気にしていた自分を捨てて自分の基準で判断しようと思った。

N：今回のセミナーを通して、海外に対して感じていたハードルが低くなり、自分が中国へ留学に行きたいという意思がさらに強まった。これまでは海外留学（特に自分の場合は語学留学）に行くときに、たしかに海外での生活は貴重な経験だが、どうしても行った期間の分大学卒業が伸びるということが少し不安だった。しかし今回の清水さんの講演を聞き、たとえ卒業が伸びたとしても、それ以上に海外での生活で得られる経験は大きいと感じ、卒業が遅れるという不安を良くも悪くもかなり払拭できた。

O：私は去年までは留学したいという気持ちがとても強く、いつからか留学よりも青年海外協力隊などに興味を持つようになっていたが、今回のイベントを通して留学したいとまた考えるようになった。

３．今回のイベントに主催側として関わった経験は、あなたにとってどんなものでしたか？当日だけ参加した場合と比較して、何か違いがありましたか？あるという場合には、具体的にどういう部分が違ったと捉えられるか、特に違いがない場合には、一参加者としてのあなたの参加経験を振り返ってください。

L：まず、ゲストスピーカーである清水さんと言葉を交わしたり、知ったりするができて当日清水さんの話がよく頭に入ってきた。事前にイベントを企画する段階でテーマについて、今回では海外について考える時間が増えて、イベント当日より前に様々なことに思考を巡らせるきっかけになった。質問も当日に浮かんだものと前もって聞こうと思っていたことの両方があり、聞きたいことが参加のみより聞けたと思う。

M：事前にある程度情報が与えられているおかげで話がすんなりと理解できて、聞きたいことも事前に用意できたと思う。それと講演後に主催側の時間を設けてもらったため、もっと入り込んだ話しや軽い相談もできてよかった。

N：こういったセミナーに主催者側として関わるという経験が初めてだったので、会の日程や形式の決定、広報、ゲストスピーカーとのタイムスケジュールの調整など、一連の準備を経験出来たことは非常に貴重な体験となった。参加だけした場合と比べ違った点は、会をきちんと進行、成り立たせなければいけないという責務感だった。今回のセミナーでは清水さんの講演のパートが予定より大幅に伸び後半の質問のパートが短くなった際、参加者であれば会の進行に任せておけばいいのだが、今回は私たちが進行をしなければいけなかったので、用事がある人の質問を優先させるなど臨機応変な対応を自分たちでやらなければいけなかった。また、自分も参加者の一人でありながら、他の参加者が質問しやすいように順番を回していくというのも非常に良い経験となった。

O：イベントを運営するにあたって何が必要かなど、主催者側の視点で考えられたと思う。

４．今回のイベントで予定通りに運んだと思われる点、予想よりうまくいったと思える点、また、もう一度、キャリアイベントを開催するとしたら、こんなテーマや形態でやりたい、

こんなスピーカーを呼びたい、あるいは今回と比べて、もっとこんなことを工夫・改善をしたい、などについて、教えてください。

L：参加者は想定通りの人数が集まり、うまくいった。ゲストの清水さんのおかげでもあるが参加者に喜んでもらえた点はうまくいったと思う。

会場設営を早めにできれば事前打ち合わせがしっかりとれ、進行が想定通りうまくいったのではないかと思う。臨機応変には対応できたと思う。

次回があれば、会場でのリハーサルを事前にして会場設営をしっかりしたい。また、少し規模が大きいものもしてみたい。

M：質問がたくさん出てくると予想し質問時間をたくさん設けたのがうまくいったと思う。４、５限の引き継ぎ等もっと細かい進行を決めた方が良かったかなと思った。

N：予想通りに進んだこととして、参加人数を、清水さんの講演の後、円になって質問できるように 10 人前後を予定していたが、当日は 10 人強の参加人数で予定通り円になって質問することが出来た。予想よりうまくいったと思う点は参加者の質問で、時間が足りなくなるほど質問が多かったことだ。全員が能動的に質問をしてくれたので良かった。

次回のキャリアイベントの案として、自分は食品パッケージなので、食品関係で、例えば美味しさの研究をしている人をゲストスピーカーとして呼んでみたいと思う。

O：前回は主催側の学生がもっと多かったと聞いて、４人くらいがちょうど良いと思った。４人でもなかなか時間が合わなかったり、仕事量にかなり差があったりして難しいと思った。

５. その他、感想や意見など自由に書いてください。

M：今回、山城君に任せっきりになってしまって彼の負担を増やしてしまい申し訳なかった。またこういう活動に参加する機会があれば、もっと協力的に活動したいと思う。全体的には講演はとても充実していて他の参加者からも良かったという声が聞けて嬉しかった。

N：清水さんの思い切った行動を見ていると、もちろん努力ありきだが、人生は結局何とかなるものだと感じた。

O：今回声をかけていただいて運営側に回ることができ、いろいろな経験ができて良かったと思います。ただ、その運営をする人たちが公に集められないで個人的に声がかかるのがなんだか不平等な感じがしてどうなのかと思いました。

以上の回答を概観すると、以下のようにまとめられよう。主催した４人の学生において、イベント終了直後の率直な実感は、ゲストの生き方、留学の実際、具体的なエピソードなど、参加者としての感想に集約された。自らの意識や価値観、考え方に関わって大きな変化があったというよりむしろ、留学意欲を再確認し、成長に向けた能動的姿勢への自覚を促されたことが窺えた。さらに、主催側としての経験が自分にどんな意味や影響を持ったかについては、①ゲストとの打ち合わせを重ね、コミュニケーションを深めたことや、事前にゲストの一定の情報を得ていたことによって、当日の話が理解しやすくなった（「よく頭に入ってきた」「すんなりと理解できた」）こと、②主催者側の視点で考えることができ、一連のイベント準備の経験が得られ、また責任感をもって臨機応変に取り組めたこと、③当日の質問のみならず、事前に質問事項を準備できたこと、④講演後のゲストと主催学生の振り返りの時間を活かせたこと、などが挙げられている。

またイベントの企画・運営自体の振り返りとして強調されたのは、予想通りの人数確保と進行ができたこと、「参加者に喜んでもらえた」「参加者からもよかったという声が聞けた」こと、「予想以上にうまくいったこと」として、参加者が熱心で「時間が足りなくなるほど質問が多かった」点が挙げられた。これらはすべて「次の機会」への意欲や見通しにも、つながっていたように思われる。

他方で、改善事項としては、①スタッフの人数としては、今回の「4 人くらいがちょうど良い」と捉える一方で、4 人でも「なかなか時間が合わなかったり、仕事量にかなり差があったりして難しい」との認識や「任せっきり」が、反省事項として、共有されたほか、「会場でのリハーサルを事前にして会場設営をしっかりしたい」との改善案も示された。

６　おわりに

①　イベント主催に関わって　山城裕太郎

企画者としては、参加者の方々から留学や海外への意識やモチベーションが高まったという声が聞かれ、開催した目的に沿った形になり良かったと思う。ただ、時間の関係で参加できなかった学生もいたため、その人をフォローできるような仕組みを考えられればより良かったと思う。私は企画者でありながら、スピーカーの清水さんと事前に何度も打ち合わせをさせて頂いたため、当日は参加者のように

お話を聞くことができた。

清水さんは、実際に行かないと味わえないような体験や現地で出会った人とのエピソードを多く話してくださり、海外に行くという漠然としたイメージから具体的なイメージが少しできるようになった。私自身も海外への意識が高まり、参加者としてもこの企画を楽しめたと感じる。

本報告書をまとめるにあたって、当日の音声データを聞くことで企画の日の記憶が思い起こされ、やはり海外に行きたいという気持ちを改めて持った。また、企画の思い通りになった点、改善すべき点も見え、今後の企画に活かしていこうと感じた。

② バックアップ教員として　渡邊洋子

以上、かなり大部な報告原稿になったが、第 2 回学生主体キャリアイベントの全容を、できるだけ流れに沿って掴めるようにと考え、ゲストスピーカーのお話と懇親会のやり取りの文字おこし原稿、二つのアンケートを軸に、当日の概要を、多面的に紹介・考察した。

今回のイベントについては事前に、創生学部の 1、2 年にグループ LINE での告知・募集がなされている。だが、本イベントにかなり関心があっても、アルバイト等の予定が調整できず、参加が叶わなかった複数の学生から、当日の内容について知りたいとの要望が出された。これらを受け、ゲストスピーカーのお話や懇談会のエッセンスを、了解を得てできる限り、そのままの形で理解・共有できるよう配慮した次第である。

本稿の編集作業を通して、低成長期に膨大な情報の中に埋もれるようにして自己形成し、どんどん変化する社会と「変わらない（変われない）自分」とのはざまで悶々とした日々を過ごす大学 1・2 年の学生たちが、「今」を見つめ「これから」を見通すために、次のような機会や契機が重要なのではないか、と考える。

① 日常や自分自身を捉え直し、自らの将来的なキャリアを思い描くための機会の一つに、「一人の人との丁寧な出会い・じっくりとした語り合い」が重要なこと
② その出会いは、大きなホールやステージをはさんだ登壇者と聴衆ではなく、同じ小教室や円テーブルを囲むなど、平場のインフォーマルな雰囲気の中で、質疑応答を繰り返しながら、本音や実体験を交えながら、経験談や考えなどを聴き取る時間と空間の共有によって、可能になると考えられること
③ そこで話を聴く相手は、見習うべきすべての条件を兼ね備えた、自分のまったく手の届かないところにいる「カリスマ的ロールモデル」ではなく、年齢的にも、境遇（同じ大学の卒業生等）としても、自分の延長線上にいる、自分も意欲と努力によって、同様に意義のある経験や活動が見通せるような、「触媒的ロールモデル」の存在と考えられること
④ 特に、海外留学や海外での仕事・活動など、物理的・経済的環境など外的条件がある程度、整っていても、当事者自身の不安や迷いなどが実現へのハードルとして存在する場合には、①～③のような条件を備えた機会が保障されることで、ブレークスルー（状況の突破）を迎えられる可能性も生まれ得ること

これらの検証や定式化については、筆者自身の今後の検討課題としたい。

なお、主催側学生の「その他」の発言にある「運営する人たちが公に集められないで個人的に声がかかる」ことへの疑問は、「なぜ、自分には声がかからなかったのか」との友人の問いかけを背景とするものだという。これは本取り組みが、学部主催の公的イベントではなく、有志教員で構成されるキャリア創生研究会のパイロット的取り組みにすぎないことに起因するが、これらについての教員側の説明不足は反省点である。だが、それは同時に、学生たちの中に、自他の将来的なキャリアを能動的に探究する機会への積極的な関心が芽生えてきたことをも示唆する。このことを前向きに捉えつつ、今後のキャリアイベントをはじめとする学生のキャリア支援への新たな展開を模索していきたい。

謝辞：懇親会の発言内容の掲載やアンケート回答・開示にご協力いただいた創生学部の学生の皆さん、教育学部学習社会ネットワーク課程の二人の学生さんに感謝します。本イベントの実施に当たり、後輩のためにご協力・ご尽力下さった清水千恵さん、またキャリア創生研究会メンバーの先生方に、多大なご協力とご支援をいただきました。なお、本イベントは JSPS 科研費 17K18628 の助成を受けたものです。